

## 「清水寺参詣曼荼羅」研究 塔 が果たす役割について

学習院大学大学院 上野友愛

本考察は、京都東山の清水寺参詣の賑わいを描く「清水寺参詣曼荼羅」(清水寺本・16世紀半ば/中島家本・16世紀末)を対象に、空間構成を分析し、本図がその土俗的な印象に反して、いかに緻密に画面を構築しているかを論ずるものである。

ところで、参詣曼荼羅における空間構成の一般的な特徴として、聖域空間が大きく細密に描かれ、その一方で長大な参詣道を描き込むために、参詣路空間は圧縮され、地形をデフォルメして表現しているということが地理学の側から既に指摘されている。本考察では、このような指摘の妥当性を踏まえた上で、本図がどのように描かれているのかという点を問題としたい。絵師は、参詣曼荼羅の案内絵図としての正確さを求められる中で、実際の空間をどのように歪め、制限された画面の中に図像をどのように収めたのだろうか。

実際の清水寺周辺は、参詣路の起点である五条橋(現・松原橋)から仁王門、そして本堂に至るまでかなり長く、ほぼ東に一直線に位置している。だが、ほぼ正方形の画面である本図ではそのような地形をらしく描くことと、特定の場の意味を表出することという二つの命題のもと、実際の地形をデフォルメして描かざるを得なかった。本図左下隅の五条橋から道の左右に六波羅蜜寺や八坂の塔、門前茶屋など、名ある所々を配した参詣路がS字状に大きく蛇行していることは、本図における地形デフォルメの最も端的な現れであり、そうしたデフォルメは仁王門を潜り西門・三重塔の箇所まで認められる。地形図的な意味での距離と方向は極めて恣意的に変えられているのである。しかし、論者が本図の複写を手にし現地調査を行った結果、その恣意的な空間構成が果たす案内絵図としての役目に全く違和感を覚えなかったのである。

その仕掛けとして注目したいのが、本図に描かれた三基の塔の存在である。例えば八坂の塔の場合、塔を支柱として本来直線である参詣道は大きく屈曲する。しかし、六波羅蜜寺前あるいは鳥辺野の横など諸処を歩む参詣人たちそれぞれの塔に集約する視角は、現実の位置関係に適うように計算されているのである。案内図のランドマークとなる塔は、それを「回転軸」として隣り合う不整合な空間を接合しており、塔が画中人物に同化した視点で眺められるとき、その不連続な空間の歪みは吸収される。すなわち八坂の塔の場合は左に、子安の塔の場合は右に、歪曲した参詣道を配すことで体験的視角が画面内の空間の歪みを解消することになるのだ。

さらに、それぞれの塔とその周囲の堂舎・人物との相互の位置関係を詳細に検討すると、三基の塔は、回転軸としての機能に違いがあることが明らかとなった。参詣路空間の塔は、霊場へ導くために、画中の参詣人の個別的視覚体験を仮構し、またその視覚体験に空間の流動的な回転を演出する。一方聖域空間では、霊地の俯瞰的表現を保ち、空間の歪みは三重塔一点のみに制約されている。つまり、参詣路はより具体的な体験的視角を持ちやすいようにと表され、一方、聖域空間は秩序だった空間に相応しい恒常的な視角で捉えられているのである。参詣路と聖域の地図としてのレベルには、本質的な差異があり、そのことによって、観者の宗教的体験はいっそう強まることだろう。